

アフリカ多国籍医師団を結成

人道援助、相互扶助の精神が大事

活動の主体は現地の会員

先月中旬、AMD A（アジア医師連絡協議会）アフリカ多国籍医師団が発足した。難民救援などで国境を越えて助け合うアフリカでは初めての民間ボランティア組織で、メンバーはAMD Aと十四カ国の医師ら。「人道援助の大原則は相互扶助」。菅波代表らの熱い思いがアフリカの関係者を動かした。

多国籍医師団の結成に手を貸してもらえないか。そうジブチ共和国のフアラ駐日大使から打診があったのは昨年十二月のこと。それ以来、旗揚げの機会をろかがつてきたのですが、フアラ大使らの熱心な呼び掛けに在京アフリカ外交団が賛同。結成と同時にAMD Aとジブチ、ウガンダ、ガーナなどアフリカ十四カ国から毎月五人程度の混成チームのルワンダ帰還難民救援への派遣が決まりました。

人間
発見

① 困った時はお互いさま

援助は一方的な善意の押し付けと受け取られ勝ちです。

「困った時はお互いさま」。AMD Aは八四年の発足以来一貫して相互扶助を活動の旗印に掲げてきました。現在、フィリピン、ネパール、バングラデシュなど海外十八カ国に約三百人（国内千五百人）の会員がいますが、援助活動の主体は現地の会員。日本からの派遣はそのお手伝いに過ぎません。

AMD Aのアフリカでの最大の緊急救援活動は九四年五月。ルワンダで内紛が起これ、数十万人の虐殺とともに百万人以上の難民が出た時だった。

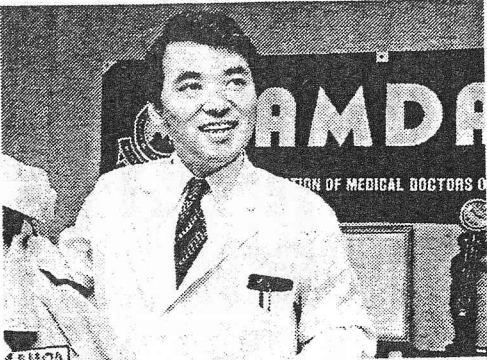
アジアでは仲間づくりの期間が十年以上あり、緊急時に出動する多国籍医師団も早く発足しました。これに対して、アフリカ、とりわけルワンダは未踏の地のろえパートナーもいなかった。ので、苦労しました。

ルワンダの難民は空前の規模。それだけに欧米のNGOの活動にも目を見張るものがあったと言えます。ルワンダ国境に日本から一番乗りで我々のチームが到着した時、至る所に外国NGOのテントと旗が立ち並び、周囲はさながら人道援助のオリンピック。活動拠点は外国勢に占拠され、国連事務所からは「どうぞお引き取り下さい」と門前払いに等しい扱いでした。

資金面・設備・人材・情報力——これを取っても欧米のNGOはケタ違いのパワー。そんな逆境のなか、我々を手助けしてくれたのが現地のローカルNGOです。難民が殺到した隣国ザイルのコマで教育・環境問題などに取り組むPLAという組織で、このグループとの出会いがなければアフリカとの交流もこれほど急激には進展しなかったでしょう。

新設の多国籍医師団はアフリカ域内はむろん、その他の地域で災害や難民が発生した際にも、援助活動にあたる画期的な民間ボランティアチームです。

「人道援助はお互いに参加することに意義がある」。この医師団の旗揚げが国際社会に及ぼす影響は大きいと思えますね。



アジア医師連絡協議会代表

菅波 茂氏
すがなみ しげる

「相互扶助の精神がなければ国際協力は長続きしない」

（聞き手は編集委員 佐藤徳夫）